届け 世界の果てまでも

令和４年５月１３日　Ｎｏ．９　文責　校長　飯久保一男

子どもたちから元気やパワーをもらって

子どもたちの登下校を見守ってくださっている見守り隊の方々に

「いつも子どもたちのためにありがとうございます。」

とお礼を言うと

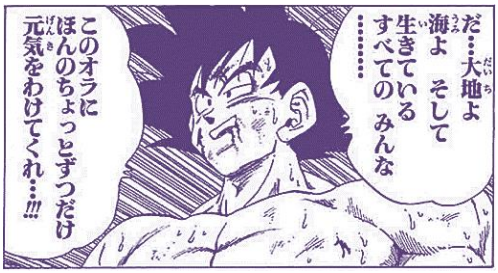
「自分のためにやっているだよ。

子どもたちの元気なあいさつから元気をもらっているさ。」

というような話をいただきます。子どもたちには「大人を元気にする力」があるのです。

＜いきなり脱線します＞

「ドラゴンボール」（作：鳥山　明）の主人公「孫悟空」の必殺技に『元気玉』という技があります。この技は人や動物や植物のありとあらゆる生物から，さらに，大地，海，大気などからも，少しずつ元気を分けてもらい，それらを集めて強力なエネルギーに変えて攻撃する技です。しかも，善良な者には効かず，邪悪な心をもった者には最強の力を発揮する技です。



私たち教職員の仕事は，この『元気玉』によく似ていると思っています。教職員は，子どものことが大好きな者の集まりです。その子どもたちの，がんばる姿・やってみたいという意欲などは，私たちを元気にしてくれます。子どもたちの笑顔や元気が，私たちにもたらす力は大きなものです。『元気玉』のように子どもたちから少しずつ元気を分けてもらえると，私たちの大きなパワーになります。そのパワーが私たちの強力なエネルギー源になって，授業や授業の準備へ向けての努力，粘り強い指導へのモチベーションにつながるのです。

No. ４で「子どもの話を聞くゆとり」という内容を書きましたが，私は，教師のゆとりには，**「時間のゆとり」**と**「研究を重ねたゆとり」**の２種類があると思っています。

「時間のゆとり」

時間にゆとりがあるというのはわかっていただけると思いますが，「ブラック企業」などと言われてしまう教職員の仕事には，なかなかそのゆとりがないことも事実です。

「研究を重ねたゆとり」

若手教師の多い本校では，働き方改革に逆行するかもしれませんが，その教科や単元や教材についてとことん研究してあるからこそ生まれるゆとりがあります。「心のゆとり」とも言い換えられます。

…山登りで例えてみます。ゴールを山頂としたとき，その山頂にたどり着く山登りのルートはいくつかあるものです。一つのルートしか知らないと，その道ががけ崩れなどで登れなくなったときには，ゴールの山頂にたどり着けません。別のルートを知っていれば，切り替えてそちらのルートから登ることができます。その山に，いくつも登山のルートがあり，それぞれのルートのことをよく知っている者が，ゴールの山頂にいれば，「ゆとり」をもって別々のルートを登ってくる者を気長に待つこともできます。また，電話やメール，トランシーバーなどを使って指示を出したり，応援をしたりすることができます。

その日の授業や，その単元のゴールをめざして，子どもたちが「学び合い」ながら，主体的に学習していく場合，教師が事前の研究を積み重ねて，いくつかのルート（方法）を知っていることで，その子の学習がどのルートを通っているのかを理解できます。また，そのルートを行く子どもに「付き合うゆとり」や「待つゆとり」がもてます。しかし，一つのルートしか知らない教師は，そのルートを外れそうな子を見ると，そのルートに戻さなければいけないと一生懸命になってしまい，ゆとりがなくなります。

…前号の坂本龍馬の言葉に「道は一つということはない」という言葉がありました。

子どもたちに指導するということは，この「ゆとり」をもつための研究や準備が必要です。子どもたちの主体的な学習にしようとすればするほど，研究や準備が必要になることはご理解いただけると思います。ところが，この研究や準備には相当な時間と労力が必要です。各担任はその他にも仕事を抱え，「時間のゆとり」がない中での取り組みになります。その学年を何回も経験している教師であっても，子どもが違えば同じ授業にはなりません。常に，研究と準備が必要なのです。また，その学年を初めて担任する教師にとっては，全ての授業に研究と準備が必要になります。簡単にできることではありません。

校長や教頭に相談してもらえば，もちろん指導・助言をします。そして私たちよりも相談しやすい先輩教師がいます。学年教師で授業を考えると，ベテランの学年主任が若手教師への指導やアドバイスができます。若手教師はそこにアイディアを出し…，と学年で同じ方針で取り組む授業の構想を練ることができます。そして，ゆとりをもって授業を迎えることができるのです。授業をした後も，それぞれの授業の様子や子どもたちの学習の様子を伝え合うことで，授業を修正しながら進めていくことができます。

日本の学校には，校内研究という素晴らしい文化があります。研究目標やめざす子どもの姿や授業の姿を全教職員で共有していきます。その子どもの姿や授業の姿に迫るために，どのような授業や活動をつくり出していくのかを研究しています。全教職員が授業のイメージを共有し，全教職員が同じ方向性をもって授業づくりに取り組むことで大きな成果が生まれます。それを６年間積み重ねていくことで，めざす子どもの姿を実現していきます。さらに，今年度からスタートした小中一貫校としての取り組みによって，９年間を積み重ねていくことが可能になりました。櫛形地区の全教職員がめざす子どもの姿を共有しています。

「時間のゆとり」がない現状で，教師のモチベーションを保ち，上げていく，その源は，子どもたちです。授業の構想を考えるとき，浮かんでくるのは子どもたちの顔です。こんな問題を出したら，子どもたちはどんな反応をするだろうか，〇〇さんが活躍してくれる授業になるかな，□□さんならこんなことを言うんじゃないかな，などと考えていくと，授業を考えることがどんどん楽しくなっていきます。

私たちの仕事は，子どもたちから，元気やパワーをもらって，日々過ごしていけるステキな仕事であることは間違いありません。

６月で２９歳，５月末で２６歳になる息子が２人います。
長男が産まれたときは「ゆとり」がなく，おっかなびっくりでした。
次男のときは，長男のときの経験がありましたので「ゆとり」がもてました。
そんな育て方のためか，長男は神経質な感じで，次男は大雑把に育ったように思います。
「ゆとり」がなかったはずなのに，写真や動画（ビデオ）は長男のほうが圧倒的に多く残っています。